ふるさとの歴史 こぼれ話 Vol.26

オランダ人技師 デ・レーケと砂防工事

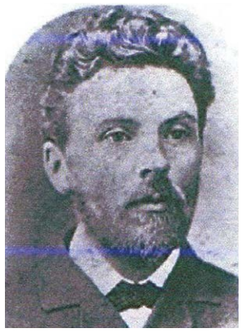
―現岐阜市域でも5箇所で、砂防工事が…？―

○木曽三川分流工事を成し遂げたデ・レーケが、金華山や志段見などの砂防工事に関わっていたの？

1. 明治新政府とデ・レーケ

明治新政府は「富国強兵・殖産興業」を掲げて国力をつけようとしていました。そのためには、産業を振興し、水運・陸運を整備して流通を良くしなければなりません。政府はその実現に向けて、英・仏等の技術者や専門家を招聘（しょうへい）しました。

土木技術の分野ではオランダの技術者を登用しました。土木技師ファン・ドールンやデ・レーケ等で、まず築港の計画や指揮に当たらせました。ところが、築港のためには洪水の度に土砂で港を埋めてしまう河川の治水工事を併せて進めなければならないことを痛感し、河川の抜本的な治水に取り組もうとしたのです。


デ・レーケ

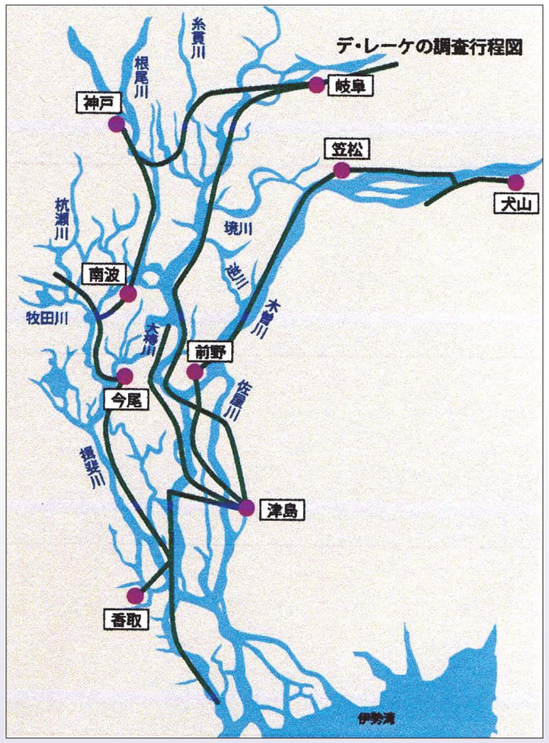
明治9年（1876）、デ・レーケは四日市の大規模築港のために木曽三川河口付近の調査を行い、「四日市築港計画図」を作成しました。

その頃には、多くの日本人がオランダ人技師たちの技術力を高く評価し、オランダ人による治水計画の樹立を求める声が高まりました。

明治10年（1877）10月、三重・愛知両県の県令は連署して、「水理工師及び本局官員出張検査の上、治水指示を受度…」と内務省に願い出ました。これによって、デ・レーケによる木曽川改修調査が始まることになりました。

2. デ・レーケ木曽三川の実地調査

明治11年（1878）2月23日から、デ・レーケは木曽三川の実地調査に取りかかりました。犬山から笠松、羽島市桑原から津島、立田輪中から油島締切、桑名香取など。3月1日からは揖斐川筋の調査に入り、香取から今尾（海津市平田町）、そして牧田川の上流・安八郡神戸町までを調査。4日からは糸貫川など長良川右支川を調査して岐阜に宿泊しました。翌日の5日は岐阜を拠点に長良川上流の古津まで調べ、6日には岐阜から長良川筋を調査して津島へ。7日は津島を拠点に勝賀周辺（海津市平田町）を調査しました。この結果を「木曽川下流概説書」としてまとめ、4月6日に石井省一郎土木局長に上申しました。



デ・レーケの調査行程図

この概説書では、水害の原因については山地からの流出土砂による河床堆積が原因であるとし、木曽川を分離しようとするものでした。つまり「立田輪中の東側を下流端まで開削して新たな木曽川の河道とし、今までの木曽川河道は長良川専用の河道とする。このような木曽川の分離によって、長良川及び揖斐川の水面は著しく低下し、各輪中の悪水排除が容易になる。しかし、この効果を永続させるためには、各河川流域の防護・砂防を怠ってはならない」と指摘しました。

そして、施工の順序は山地の砂防を先行し、その後に本川の改修を行うものとしていました。

3. 各地で砂防工事開始 ↓岐阜市域でも5箇所で施工？

上流からの土砂流出の抑制が治水の最重要課題と考えたデ・レーケは、忙しく各地を視察・調査をしながら、提言をしたり予算の増額を要求したりしました。

デ・レーケは、明治12年（1879）11月26日に岐阜市長良の岩舟山、27日には各務原市と関市の境にある金比羅山に登り、周囲を観察しました。そして、山林の乱伐が私有林だけでなく官有林にまで及んでいることを確認し、「このまま放置すれば木曽三川改修は良い結果が得られない」として、山林伐採の規制と砂防の緊急施工の必要性を意見書にまとめ、石井土木局長に提出しました。

こうして明治11年（1878）の春、木曽三川下流改修に先立ち、愛知・三重・岐阜三県の各地で砂防工事が始まりました。

国土交通省木曽川下流河川事務所発行の『木曽三川歴史文化の調査研究資料・明治改修完成百周年特別号・KISSO』では、以下のように記述しています。

「岐阜県下の砂防工事は、デ・レーケ指導のもとに明治11年に養老断層山地から揖斐川に流入する般若谷に始まり、羽根谷など次いで春日断層より揖斐川に注ぐ粕川の谷、そして木曽・長良両川の形成した扇状地の扇頂部にあたる岐阜の志段見、加野、木曽川では各務原市鵜沼、さらに中流部で両川に流入する支派川の武儀川、津保川、蜂屋川等の各谷に、木曽川筋では可児川と下流の矢戸川（略）…施工されました。」「この意見書を契機として各地で砂防工事が拡大されます。明治15年に着工された箇所は、岐阜県加茂郡滝田村、可児郡下切村、西帷子村、東帷子村、菅刈村、塩村、顔戸村、武儀郡佐野村、山県郡富永村、加野村、方県郡岩崎村、加茂郡肥田瀬村、稲口村、岐阜市（岐阜町）などにのぼりました。」

また『岐阜県治水史・下巻』では、デ・レーケの指導の下、施工された国営・県営等の砂防工事等について詳しく書かれています。

これらの史料によって、現岐阜市域では、志段見・日野・加野・岩崎・岐阜町（金華山？）等で砂防工事が行われた事が分かりました。

川	郡・町村・大字	着手年月	竣成年月	工費
木曽川	恵那郡長島村中野（外2ヶ村）	明治14年10月	明治19年 3月	約7,679円
	可児郡御嵩村（外6ヶ村）	同14年 3月	同20年 3月	33,773円
	各務郡鵜沼村	同13年 3月	同20年 3月	4,929円
	合計11ヶ所			約46,371円
長良川	加茂郡肥田瀬村（外3ヶ村）	明治15年 7月	明治16年 2月	約10,516円
	武儀郡関町	同13年10月	同19年 3月	11,275円
	厚見郡日野村	同14年 6月	同17年 3月	3,542円
	方県郡志段見村（外2ヶ村）	同13年 3月	同21年 3月	11,881円
	岐阜市（→当時はまだ岐阜町）	同15年 8月	同15年11月	799円
	合計10ヶ所			約38,013円
揖斐川	下石津郡大田村	明治11年 5月	明治20年 3月	約41,388円
	三重県で14ヶ所＋1ヶ所			約74,187円

明治12年以降、国費の砂防工事を施工した所（『岐阜県治水史　下巻』をもとに作成）

4. 志段見等5箇所の砂防工事跡は？

松尾池の堤に石碑が建っています。碑文には、「明治18年内務省直轄事業ニ依リ江平技師監督ノ下砂防工事ヲ施行セラレ此処ニ貯水池ヲ作リ下流部落（志段見）ノ原野ヲ美田化セシメラレシ…」と書かれています。

江平技師とはデ・レーケの指導を受けて県内各地の砂防・治水工事を監督していた人で、この松尾池は砂防工事の一環で造られたのです。

松尾池を少し下った岩舟川の谷を見ると、多くの石が整然と敷き詰められています。谷を上って行くと、石が積まれた堰堤（えんてい）が十箇所以上もあります。まさに、ここが明治13年着手、明治18年完成の志段見の砂防堰堤・工事跡でした。

志段見の堰堤

日野・加野・岩崎・岐阜市（当時は岐阜町）の砂防工事跡は、まだ確認されていません。金華山にも砂防工事跡があるのでしょうか？

○この文章は、「岐阜県治水史・下巻」、「木曽三川歴史文化の調査研究資料・明治改修完成百周年特別号・KISSO」等をもとに、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア
「お話・岐阜の歴史サークル」
代表　後藤　征夫
http://book.geocities.jp/gifurekisi/rekisitop.htm